

受験番号	氏名

一．次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「中学に入り、顔のホクロをからかわれて教室に行けなくなってしまったソラは、保健室で風変わりな同級生ハセオに会い、ナゾクという俳句遊びに誘われる。ハセオの熱意に巻き込まれ、養護の北村先生と三人で句会をやってみよう、ということになったが、ソラはその句会を途中でとび出したきり学校を休んでいる。」

「ちよつと、外行こう」

ソラは、ハセオをうながして、階段を下りていった。うしろで母が、不思議そうな表情で見送っているのが、目に浮かぶようだった。ソラに來客があることなど、もう一年以上なかったのだから。

すでに日が暮れかけていた。夕焼けの上には、コーヒー色の夜空が迫っている。駅前まで行けば、バーガーやドーナツのお店もあったが。ハセオとそうした店で向かい合っているところを想像すると、なんだか違和感があったので、選択肢から外れた。

おのずから足が向いたのは、① いつもふらつと行く陸橋の方角。後ろをついてくるハセオは、いつになく物静かで、おなかをすかした犬のように a 素直 だった。

道の両脇の はたけ の作物は、あおおと葉を茂らせている。道ばたの土に根付いている細い雑草は、さらにはつらつとしてい

る。道が急に盛り上がったところに、陸橋がかかっている。ほとんど人の通らないこの橋で、通り過ぎる電車を眺めていると、心がおちつくのだ。学校で おみの 臣野シゲルたちのいじめの対象になっていたときも、放課後ここへ来て、らんかん 欄干にもたれて、時間を過ごしたものだ。

電車が、長い体をくねらせながらやってきて、けたたましい音とともに、橋の下を過ぎていく。二、三分おきに繰り返される、単調な映像が、いやな記憶がわきあがってくるのを、防いでくれるのだ。

ソラが、いつものとおりに欄干にもたれると、ハセオも、となりで同じポーズをとる。

しばらく、a した沈黙が流れるのかなと思っていたが、

② ソラ、あんな、悪かったよ

A ためらいもなく、頭を下げてくるあたりが、ハセオらしいと思いつつ、ソラは反応を示さなかった。

「あんな、あの句なんだけどな……いや、まず、これ見て」

ハセオは、さっと手を出す。どこから取り出した様子はなかったから、ずっと手に握っていたようだ。てのひらを、ひらく。薄暗がりの中でも、あきらかなそれは、ヒマワリの種だった。

ソラの顔がくもったのを察したのか、③ ハセオは早口になつて、

「これ、北村センセの花壇のやつを、一個もらってきたんだけど……おれにとってはな、ヒマワリって、こう、噴水みたいというか、花火みたいというか……」

ハセオは、両手をけんめいに上下させた。たぶん、噴水のかたちを示したかったのだろう。でも、だれかを b オウエン しているような、場違いなジェスチャーになってしまっていた。

「……こんな感じでな、地面の中のパワーが、あの茎を通して、噴き出しているように見えるの。それで、ヒマワリの種は、そのおもとつていうか」

指先に挟んだ種を、b 眺めつつ、

「それで、あのかな、ソラの顔にホクロあるな、ヒマワリの種みたいだな、ソラの顔からヒマワリ、ぶわーっと生えたらおもしろいとか……ぜんぜん、そんな、バカにするつもりは、なかったんだよ。あのあとも、どうしてソラが怒ってんのかわからなくて、北村センセに言われて、ようやく気づいたんだ。でも、どうしたらいいのかわからなくて」

こぶしを握りしめて、種を再びてのひらにおさめてから、ハセオは、さっきと同じ、欄干でソラと並ぶポーズに戻る。

c 話すハセオの声は、ときどきやってくる電車の ごうおん 轟音にかき消されながら、続いていく。

「でもな、おれ、下手くそなんだよな。まだまだ、俳句、下手くそでさ。あの句もさ、挨拶のつもりだったんだ。あのとき言

受験番号	
氏名	

っただろう？ 挨拶だって…：…それで、おれも、ソラに何か挨拶の俳句が作れんかなと思って、それで出てきたのが、あの句でさ…：…でも、下手くそだよな、ぜんぜん伝わってないんだもんな、まだまだだよな…：…」

ハセオは、話しているうちに、ソラに謝っているというよりも、自分の俳句の下手さにしよげているようになった。

「挨拶句ってさ、うまくいくと、すげー句になるんだよな、たとえばさ、昔の人の句で、

たとふれば独樂こまのはじける如くなり

っていうのがあって、これ、死んじゃった友だちっていうか、ライバルに贈った、まあ、一種の挨拶句なんだけどさ、コマがばちばちーって戦うような二人だって言ってるさ、こういうたとえができるのって、カッコいいと思うんだよな。おれの句、ぜんぜんだめだよな」

聞いているうちに、ソラは、怒りや フカイカン よりも、④ が強くなってきた。

コイツ、どれだけ、俳句好きなんだよ。

ソラに謝っているのか、自分の力量不足を嘆いているのか。

だいたい、友だちが死んだときに詠まれた句を例にあげるなんて、不吉じゃないか。友だちの前で――

そこまで思ってる、ソラははっとした。

そうか、僕にとっては、ハセオはもう友だちなんだ。

「もう、いいよ」

その言葉が、素直に出てきた。いま浮かんたというよりも、すでにソラの中にあって、出るのを待っていた、という感じの言葉だった。

ハセオが、悪意で、ああいう句を作るやつじゃないことは、わかっていた。こんなに俳句が好きなハセオが、俳句を、榔榆からかうためや、馬鹿にするために使うはずはない、ということ。

「そっか、ありがとう！」

その言葉が聞きたかった！ とばかりにハセオの顔が輝いたのは、夕闇の中でも、はっきりわかった。

ソラの手を、dつかんで、あらあらしく上下に振る。

「おれ、ずっと俳句をやってきたけど、ソラだけなんだ、『俳句なんて』って言わなかったやつ。オヤジもさ、友だちもさ、みんな、「俳句なんて、古臭い」とか『将来のために何の役にも立たない』とかって…：…」

ソラははっとして、ハセオの顔を、正面から見た。

⑤ こういうふうに見えて、ハセオも、いろいろな言葉に傷ついてきたのかもしれない。

オヤジ――ハセオのお父さんって、どんな人なんだろう。

同年代の友だちに否定されるのは、わかる。俳句は、スポーツとかゲームとか、ふつうの中学生が好きこのんでするものじゃない。

だけど、親にも否定されるというのは、どんな理由なんだろう？ ソラの場合は、父も母も、ソラの好きなことや、言いたいことを、否定はしなかった。たとえ『保健室登校』になったとしても、『行きたくない』という意志を、dソンチョウしてくれた。

ハセオの家では、そうした関係が、成り立っていなかったのだろうか。

気になったが、聞くことはためらわれた。いつか、ハセオが、話したいときに、話を聞いてやれる関係でいたい――いま、ソラが願っているのは、それだけだった。

ぶんぶんぶん。

激しく手を振られて、ようやく解放されたソラの手には、何か違和感があった。

手を開くと、⑥ そこにはヒマワリの種がひとつ。

「なに、これ」

受験番号	
氏名	

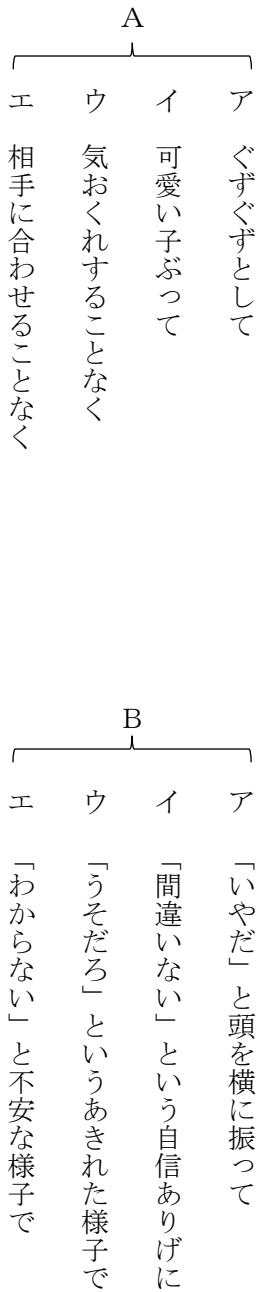
「いや、やるよ」
「こんななんもらつても……さつき、うち見たでしょ？ 植える庭、ないよ」
「じゃあ、こつから投げるか？」
ちようど、**e** 鎖をひきずるような音を立てて、陸橋の下を、電車が通過したところだった。
「線路のわきに、いつかヒマワリが咲くかもな。それはそれで、俳句に詠んでみたい」
ソラは、その言葉にうなずくと、ぱつと欄干の向こうへ、こぶしを振った。
ハセオは、フェンスに阻まれる恰好になりながらも、投げられたもののゆくさを追おうと、身を乗り出した。
しかし——線路へまっさかさまに落ちていくヒマワリの種は、いくら目を凝らしても、見えなかった。
ハセオはすぐさま、ソラのほうに視線を移した。待ちかまえていたように、ソラはてのひらをさしだしてみせる。そこには
さつきと変わらず、大地のパワーのおおもとが、ひとつ。
「捨ててもいいって！」と、ちよつと照れくさそうなハセオ。
「いや」ソラは B かぶりをふつて、ぐつと手の内の種を握りしめた。
「取っておく」

(高柳克弘『そらのことばが降ってくる 保健室の俳句会』より)

(句読点や符号は、すべて一字分と数えて解答しなさい。)

問一 線 a e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 線部 A 「ためらいもなく」・B 「かぶりをふつて」の意味として、最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。



問三 線①「いつもふらつと行く陸橋」とあるが、なぜソラはいつも陸橋へ行くのか。その理由を説明した次の文の I Ⅲ にあてはまる語句を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

陸橋の下を通る電車を見ていると、その I 五字 が、 II 五字 がわきあがってくるのを防いでくれるので、 III 六字 から。

国語 四

受験番号	氏名

問四 ――線②「ソラ、あのな、悪かったよ」とあるが、ハセオはどのようなことを「悪かった」言っているか。具体的に三十字以内で説明せよ。

問五 ――線③「ハセオは早口になって」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア ソラが何も言ってくれないまま沈黙が続くのは耐えられないと思い、何かをしやべり続けようと思ったから。
- イ ソラが何も反応してくれないので、「あの句」のことを忘れていると思い、早く思い出させようとしたから。
- ウ ソラの反応がないことにじれったく感じ、どのような思いで「あの句」を作ったのか早く知らせたかったから。
- エ ソラにまた嫌な思いをさせたと感じ、ヒマワリの種についての考えをできるだけ早くソラに伝えたかったから。

問六

a

d

 にあてはまる最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

ア ぼつぼつと イ じつと ウ ぐつと エ しんみりと

問七 本文中の

④

 に入る最も適切な言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 後悔する気持ち イ 敵対する気持ち ウ あきれる気持ち エ 恥じる気持ち

問八 ――線⑤「こういうふうに見えて」とあるが、ソラはハセオをどのような人だと思っているか、最も適切な言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 単純な性格で、自分が思ったことをその場で素直に表現する人。
- イ 自分が悩みを抱えていても、相手の気持ちに寄り添うことができる人。
- ウ 俳句に熱中するあまり、いつも自分の世界に入り込む物静かな人。
- エ 俳句のためなら、人を傷つけてしまっても仕方がないと思っている人。

問九 ――線⑥「そこにはヒマワリの種がひとつ」とあるが、このヒマワリの種を言い換えた言葉を、文中から十一字で抜き出して答えよ。

国語 五

受験番号	
氏名	

二. 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私の娘は二歳までは保育園、三歳からは預かり保育のある幼稚園に通っている。自分は*裁量労働制の下で働いているから、定時の仕事に就いている*連れ合いに比べて時間の **a**都合をつけやすい。そのため、自分の方が入園式や終業式といった行事に出ることが自然と多くなる。

そして、そのような場では、居並ぶ保護者に向かって先生が「お母さん方は……」と呼びかけるケースがよくある。自分はそのたびに少し肩身が狭いような、みそつかすになったような気分になるのだが、ただ確かに、その場にいるのは圧倒的に「お母さん」たちなので、先生の方からしてみれば、目の前にいる人たちに対する自然な呼びかけなのだと思う。（自分もそういう場では何となく憚^{はばか}って、目立たない隅の方にいつも座っている。）

いまこの国で、家庭において夫が育児や家事に費やす時間が **b**ジョウジョウする傾向にあることは間違いないが、ほかの先進国に比べて低い水準に留まっているのも事実だ。つまり全体として見れば、依然として育児や家事のかなり多くの割合を妻の方が担っている状況は変わっていない。

こうしたなか、コンビニ大手のファミリーマートが販売する総菜のシリーズ商品が「お母さん食堂」と銘打^{めい}たれたことに対して、「食事は母親が担当するもの」という意識が社会で強化されてしまふ」という類いの批判が出たこと―― **A**、実際に高校生有志が、名称変更を求めるオンライン署名活動を行ったこと――は記憶に新しい。

それから、一九五〇年代から続いている「おかあさんといっしょ」というNHKのテレビ番組も、その名前が「育児は母親が担当するもの」という性役割の固定化に一役買っているという指摘は以前から見られる。二〇一三年からは「おとうさんといっしょ」という名前の派生番組が同局で始まり、時代や人々の意識の変化に即している面もあるが、ほぼ毎朝放映されている「おかあさんといっしょ」という番組名自体に変更はない。

ジェンダーバイアス(社会的な性役割についての固定観念)をめぐる問題に関しては、「お母さん」という言葉以外に、「母」というこの一語自体が社会で含みもってきた特定の意味合いも無視できない。

B、「母語」、「母国」、「母校」といった言葉は、文字通り母体のなかで受精卵が子へと成長して生まれて出てくるといふ自然的事実や、その後の育児を行う役割を主に母親が担ってきたという社会的事実が基になっていると言える。つまり、言語であれ、国であれ、学校であれ、自分を産み育てた根源や基盤の比喩として「母」が機能しているということだ。そのため、たとえば先の「母語」という言葉を「第一言語」等の言葉に置き換えると、「母語」のもっているいわば「根源的な言語」というニュアンスが **c**希薄になるだろう。**C**、生まれた後にいつの間にか身についており、以来そこから完全には離れることができず、自分自身をかたちづくる大きな基盤となっているもの、というニュアンスである。

D、子どもの誕生にはもちろん父親もかかわっているし、育児を母親が担うのも必然的な事柄ではない。むしろ、「母語」、「母国」、「母校」といった言葉の使用――さらに、たとえば「運営母体」のような、「母体」の比喩的用法――は、この社会におけるジェンダーバイアスを維持する土台の一部を構成しているのかもしれない。実際、先の「母語」という言葉について言えば、たとえばある論文において、「母語」というのはジェンダー化された表現なので、実際には「親語」といった用語をあてるべき」という主張がなされたりもしている。

しかし、当該の論文で直後に「今のところ一般的に用いられる適切な代案がない」とも言われているように、**①**「母語」を「親語」に言い換えることは(少なくともいますぐには)不可能だ。なぜなら、先に確認したような「母」という言葉が含みもつ意味合いを、「親」という言葉は歴史的に備えていないからである。また、「母」の比喩的意味が*通底している言葉は「母国」、「母校」、「母語」のほかに、「空母」「母船」「母屋」などさまざまなものがある。このように無数の言葉が相互に浸透し、つながり合っているなかで、「母語」という言葉だけ「親語」などに置き換えたとしても、それは不自然で浮いた言葉であり続けるだろう。

②では、「母」のつく熟語は一挙に別の言葉に置き換えてしまえばよいのだろうか。しかし、まずもって、どこまで置き換えればよいのだろうか。たとえば、「酵母」や「分母」、「母集団」、「母数」、「母音」といった言葉も全部別の言葉に換えるべきなのだろうか。だが、前章で外来語について強調したのと同様に、私たちの生活に深く根を張っている言葉たちを急に引っこ抜いて、よそよそしい言葉に置き換えることは、その分だけ日本語の表現力や、日本語を用いた思考力を*脆弱なものにし

受験番号	
氏名	

てしまう。「母」のつく熟語を一切用いることなしに思考し、表現し、生活を送ろうとするのは、いまの私たちには困難きわまりない。

母や母体の d ガイネン が特定のイメージ——何かを産み育てる基盤、根源、大本といったイメージ——を含みもつことは、そもそも、古今東西の多くの文化にかなり古くから見られる特徴だと言える。たとえば、ギリシア神話など各地の神話には、世界や生命の根源として位置づけられる地母神（大地の母なる神）がしばしば存在する。また、中国の*『老子』にも、世界の根源について「可以為天下母（それは天下の母というべきものだ）」（第二十五章）と表現する一節がある。同様の例は、ほかにも数多く見出すことができるだろう。

そして、この種のイメージは日本の文化においても存在し、それが独自の具体性をもって行き渡り、生き続けている。それは、「母屋」や「酵母」等々の言葉というかたちで、文化遺産としての日本語にもはつきりと認められる。日本語であれ、あるいは別の自然言語であれ、子どもが母語を学ぶことは、それぞれの言語が息づく文化の伝統的なイメージないしは物事の見方を学ぶことを伴うのだ。

〔中略〕

ただし、このことはもちろん、物事の伝統的な見方はすべてそのまま受け継がれて保存される、ということの意味するわけではない。言語は生ける文化遺産であって、私たちの生活のかたちが絶えず変容を続けるなかで、言葉やその用法も変わり続けている。

そして、特定の言葉に対する違和感は、社会や物事のあり方に対する私たちの見方が変わりつつあることを示す重要なサインでありうる。たとえば、「お母さん食堂」や「おかあさんといっしょ」といったものに見られる「お母さん」の用法は、③現在でも疑問に思ったり不自然に感じたりする人が一定数おり、今後もその割合は増えていくだろう。

【 X 】

「お母さん」の用法が変わっていくなかで、その遠い先に、「母語」や「酵母」や「分母」も何らかの別の言葉に置き換わる未来がくるかもしれない（あるいは、こないかもしれない）。それは現時点では不明だが、いずれにしても、〈母〉は「親」に」という風にして言葉をただ機械的に置き換えようとしても、うまくいくものではない。

たとえば、いま発達心理学や看護学などの分野で用いられることのある「親性」という言葉は、女性にも男性にも共通する親としての意識や感情の類いを端的に指すものであり、必ずしも「母性」や「父性」に完全に取って代わるべき言葉として位置づけられているわけではない。実際、これまで日本語のなかにはその種の意識や感情を表す言葉が無かったため、「母性」や「父性」に加えて、従来は光が当たりにくかった物事の見方を聞く新語として、「親性」という言葉が少しずつ世間に広まり始めていると言えるだろう。

生活のなかに深く根を張った言葉の変化は、まさに生活の変化とともに、そして、関連する他の言葉たちの変化とともに、進行していく。言葉には大きな影響力があり——さらに言えば、権威や権力もあり——、伝統の維持にも変革にも働きかける面があるが、同時に、その維持や変革の動きによって影響される面もある。そうした相互的で全体的な影響の中身を、私たちはよく見極めていかなければいけない。

逆に言えば、一切の変化に先回りして一挙にすべてを変えることはできない、ということだ。ある個別の言葉に対して、ある人々の間に違和感が生まれてきたときに、自分もその言葉に対してあらためて注意を向けて見直すこと。そして、その言葉に関連する現実（生活のかたち、社会のあり方）をさまざまな角度から見直すこと。自分が見逃してきたものを見ようとすること。そして、その言葉のある種の用法に対して、場合によっては異議を e 唱える こと。——「母」は「親」に言い換えよ、といった単純明快な*ガイドラインに比べて、遅々とした面倒な方法に思えるかもしれない。だが、私たちの従来（物事の見方と密接に結びついている言葉に関して、その変容を促すには、そうした④地道な営みこそがむしろ不可欠だ。

（古田徹也『いつもの言葉を哲学する』より）

国語 七

受験番号	
氏 名	

＊注 裁量労働制 … 時間や方法など、働き方を労働者が決められる制度。
連れ合い … 自分の夫や妻のこと。
通底 … 表面は異なって見える事柄や思想が、その根底では互いに通じ合っていること。
脆弱 … もろくて弱いこと。
『老子』 … 中国古代の思想家による書物。
ガイドライン … 基本方針。

(句読点や符号は、すべて一字分と数えて解答しなさい。)

問一 ……線 a ｓ e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 A ｓ D にあてはまる最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア すなわち イ そして ウ たとえば エ しかし

問三 ……線①『「母語」を「親語」に言い換えることは(少なくともすぐには)不可能だ』とあるが、それはなぜか。その理由を説明した次の文の I ｓ III にあてはまる語句を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

「母」という言葉と異なって「親」という言葉には、 I 六字 というニュアンスは含まれておらず、他の言葉とのつながりのなかで、 II 二字 だけを言い換えても III 三字 だから。

問四 ……線②『では、「母」のつく熟語は一挙に別の言葉に置き換えてしまえばよいのだろうか。しかし、まずもって、どこまで置き換えればよいのだろうか』とあるが、それに対する筆者の答えとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 「母」という言葉の意味合いが社会的に変わってきているので、その流れに沿って言葉も変化させるべきであり、「母」のつく熟語を「親」などの他の言葉に置き換えるガイドラインが必要だ。
イ 「母」という言葉の意味合いが社会的に変わってきているので、それに合わせて「親」などの他の言葉に積極的に変えるべきだが、順番としては比喩的な意味合いの言葉から変えるべきである。
ウ 「母」という言葉の意味合いが社会的に変わってきているが、単純に「親」などの言葉に置き換えることは容易ではないので、言葉の用法や社会の変化をじっくり見直すことが大切である。
エ 「母」という言葉の意味合いが社会的に変わってきていても、伝統的な含みを持っているその意味合いを大切にすべきなので、「親」などの他の言葉に置き換えることは一切すべきではない。

国語 八

受験番号	
氏名	

問五 ――線③「現在でも疑問に思ったり不自然に感じたりする」とあるが、そのように感じられるのはなぜか。これを説明した次の文の **I**・**II** にあてはまる最も適切な言葉を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

食事や育児は母親が **I** 六字 であるという意識が社会の中で強化されてしまい、 **II** 三字 の固定化につながると考えるから。

問六 **「X」** には、次のA～Dの文が入る。正しく並べ替えたものを、後の中から一つ選び、記号で答えよ。

A そして、（ほかにも理由はあったが）この園は選択肢から外した。

B 家族にはさまざまなかたちがあり、多様な育児・家事のあり方が存在するということが、この園の方々には見えていないか、見ようとしていないように思えたのだ。

C わが家では、家事・育児分担を相談した結果、娘が幼稚園に通っている間は私が妻子の「愛情弁当」をつくることになっていたから、この文面には面食らい、がっかりした。

D 私自身に関して言えば、娘をどの幼稚園に入れるか検討していた頃、近所のある幼稚園の説明資料のなかに、「お昼はお母さんの愛情弁当をご用意ください」と記してあって驚いたことがある。

ア B―D―A―C イ C―A―B―D ウ D―C―A―B エ D―B―A―C

問七 ――線④「地道な営み」とあるが、この内容として適さないものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ある言葉の用法を完全に理解するために、言葉の変化を見逃さないようにすること。

イ ある言葉に対して社会の中で疑問を抱く声があれば、自らも意識的に考え直してみること。

ウ ある言葉の用法に対して、自分たちが変だと感じたときにはそのままにせず声をあげること。

エ ある言葉に関わる生活のかたちや社会のあり方などを多角的に考え直してみること。

三、次の各文の□に漢字一字を入れて、――線部の三字熟語を完成させよ。

例 山の斜面にぶどうの□樹園がある。 果（樹園）

- ① 今回の挑戦は彼の試金□になる。
- ② 生□可な気持ちでやると怪我をするよ。
- ③ 晴れた真冬の空は銀□系がよく見える。
- ④ 君はこの事件の第□者だから、口出しをしないで。
- ⑤ もういい加減にしろ。往□際が悪すぎる。